

# 湯久保の三匹獅子舞 その2

—若い人とともに後世へ伝えたい

丸山二郎（湯久保在住）

◆住民だけで獅子舞維持は難しい状況に

私たちが湯久保へ引っ越してきたのは30年ほど前の1980年7月でした。バス道路から2kmほど上った掲示板までの車道はまだ舗装されておらず、砂利道を走る車は埃だらけでした。掲示板から上は山道が続いている



狂い終わって退場

だけで標高差150mほどの急坂を毎日歩いて上り下りしていました。今は家の横まで車が上るようになり便利になりました。

仕事の都合で3年ほど留守にしていた私たちは、1984年4月に戻ってきたところでした。その頃、湯久保の住民も徐々に減り始め高齢化していました。また、村内に8校あった小学校と3校あった中学校をそれぞれ1校にする統廃合も進んでおりました。そのような中でも湯久保はまだまだ軒数も多く、それぞれ夫婦や子供のいる家族もありました。しかし湯久保の住民だけで獅子舞を維持していくのは難しいと皆が感じ始めていたのです。

なにしろ獅子舞をやるには獅子子が3人、ササラすり4人、笛吹き2人以上、謡3〜4人必要なのです。それに事前に花笠を手作りしなければなりません。そん

な訳で自分たちだけでは獅子舞の存続は難しいという気持ちで働いていたのでしよう。

◆存続させるには「自分からやらねば」と言われて

その年に自治会の臨時総会があり、その折、今年の獅子舞をどうするかを話し合われました。内容は獅子舞を続けるか、あるいは獅子頭だけを飾って終わりにするかでした。「長く続いてきた祭りだから、今まで通りやろう」というものと、反面「もう自分たちでは存続は大変だから、獅子頭だけを飾って一杯飲んで終わりにしよう」というものでした。意見も半々でした。

私は来たばかりでもあり、獅子舞についても、どのようなものがあるかを理解していなかったのですが、あまり発言はしなかったのですが、意見を求められ「長い伝統のある獅子舞だから、大変でも出来るだけ続けていけたら良いと思う」と述べました。

「ならば自分から獅子舞をやらねば駄目だ、役者を引き受けてください」と言われ、「では、やりましょう」となりました。何とか出来る範囲で獅子舞を続けること

になりました。そして、7月に祭礼の準備会議があり、私は初めて「三羽（みつっぱね）」をやることになったわけですが。

湯久保の獅子舞は三匹獅子舞です。三匹獅子舞は西多摩地区では広く行われており、一般的には12の演目があります。その頃「宮参り」「膝折り」「庭がため」「三つ羽」「毬掛り」「竿掛り」の6つの演目しか残っていませんでした。

湯久保の獅子舞は「雌獅子」と雄獅子の「大頭」「小頭」の三匹で舞うのですが、「雌獅子」がいつも先頭に立って雄2匹を引っ張っていくものです。

◆初めての私がいきなり上の方の獅子を担当

12の演目は人生を表現しているように思います。ですから「宮参り」は小学生や中学生の子供たちが初めて行う入門の演目で、小学5〜6年生が初めて舞うのを見るとその初々しさが伝わります。また、大人の獅子舞は雌獅子をめぐって雄獅子2匹が争う様子も表現され、かなり激しいものもあります。役者は「小頭」「大頭」の順に役を上がっていきま

す。雄の動きが解ったところで

雌獅子に昇格するのです。

獅子舞では「演目」を「立ち」、「舞う」ことを「狂う」と言っています。それで1つの「立ち」を覚え、次に上の「立ち」へと上がっていきます。ですから1立ちを覚えるには、最低3年はかかるというのが一般的です。「膝折り」「庭がため」までは高校生くらいまでの子供たちが狂うことが多く、「三つ羽」から上は大人が狂うことが多いのです。

上の方の獅子は皆10年以上狂っている人たちばかりであり、しかも子供のころから身体で覚えた人たちばかりでした。今まで一度も狂ったことのない私が、いきなり上の方の獅子を担当したわけですから大変でした。

獅子は笛の音に合わせて腹に付けた太鼓をばちで叩いて狂うのですが、太鼓のたたき方も初めてで見よう見まね、笛も聴きとれないという状況でした。腰を低くした激しい動きも多く、1立ち30分位狂い続けるわけですから玉のような汗を毎回かきました。

なんとか本番を迎え、狂い終わった時の達成感と充実感は例えようがないものでした。

◆笛の録音が残っていた「雌獅子かくし」を2年がかりで復活

湯久保に残っているのは6立ちだけでしたから、残りの6立ちは消えてしまう状況でした。ただ、幸いに残りの6立ちのうち「雌獅子かくし」と「剣掛り」の2立ちは、笛の音がテープに録音されて残っていました。「雌獅子かくし」の狂い方を覚えている古老がまだ元気なうちに、なんとか復活したいとの話になりました。4～5年経った頃、役者を決める前に一度練習してみようとやり始めましたが動きもうろ覚えのため、なかなか狂うことができませんでした。何しろ25年間以上も狂っていないだったので動きが合わず、「あーでもない」「こーでもない」と古老もはつきりしませんでした。

役者を決めた1年目、結局は本番では披露出来ませんでした。2年目なんとか形だけでも合わせて狂うことができ、25年以上も途絶えていた「雌獅子かくし」を狂えたことは、湯久保の住民にとって獅子舞を継続し守つていくこととする気持ちの一つにまともされたものと思えました。

「雌獅子かくし」の復活は1990年でした。そして、残る「剣掛り」も30年以上も途絶えていたもので、良く覚えている古老が元気なうちに教わっておこうと練習し始め、やっとの思いで受け継ぐことが出来ました。「剣掛り」の復活が1994年でした。

◆笛も謡も全て生演奏へと充実

これで、湯久保の獅子舞が8立ちになりました。残る4立ちのうち3立ちは「じょうじょうねこ」「花掛り」「寺参り」であると檜原村史に記述がありますが、残る1立ちは全く解りません。

それまで笛は2～3の立ちは録音テープで流していたのを、全ての立ちで生演奏にし、謡も生で歌うようにし、充実してきたのですが、時間が経過したこともあり、残る4立ちの復活は絶望的です。

◆毎年にぎやかに祭礼を開催できる頼もしさ

湯久保の住民がどんどん少なくなると、地区の子供たちも少なくなってきたしまいました。年々役者を決めるのも難しくなつて

きたことと、昔より立ち数が増えたこともあり、なんとか引き継いでくれる人がいないかを模索し始めたころ、農工大の朝岡先生と知り合うことができ、先生が講義を受け持つ立教大で獅子舞について話す機会をいただきました。若い人たちに手伝っていただき湯久保の獅子舞を後世に伝えていけたらと思っています。幸い朝岡先生も農工大でのゼミの学生を派遣してくれ、全面的に応援していただける態勢を作っていただきとても心強く感じています。

お陰で、村内に7地区残る獅子舞のいずれも後継者不足に悩んでいる中、若い人たちが手伝ってくれることにより毎年賑やかに祭礼を開催出来ることが何よりも頼もしく思われます。

これからも湯久保の獅子舞が続いていくことを信じ、応援してくれる方々はもとより、獅子舞を支えてくれる小沢地区の方や多くの方々に深く感謝申し上げます。

(まるやま・じろう) 46年目黒区生まれ。73年檜原村へ教員として転勤。80年に湯久保に移り住む。祭り世話人、自治会長なども勤める。